

『平家正節』の江戸伝播について

薦田治子

(1) はじめに

名古屋の現行前田流平家が依拠する譜本『平家正節』は、名古屋で荻野檢校知一（一七三一—一八〇二）によって編纂された。序文に「けだし平家の伝習師相受授して書なし。（中略）荻野氏これを憂ひ遂にこの書を刪述して門生に授く」（安永五年九月丹羽敬中。原文は漢文）と述べられているように、この譜本の意義は、それまでもつぱら晴眼愛好者が考案し、改訂を重ねてきた譜本を、初めて専門家である当道盲人が編纂したことにある。それまでに愛好者の手によって作られた譜本が、限られたサークルのなかでしか普及しなかったのにたいして、『平家正節』が広く全国的に普及したのは、譜本として優れていただけでなく、当道側から発表された「正本」だったからであろう。

しかし、音楽には楽譜に書き記せない要素もたくさんある。平家の規範、つまり作品のあるべき姿は、楽譜ではなくあくまでも師匠の演奏の中にある。そうした音楽のあり方が、楽譜の伝播の中でさまざまなバージョンを生み出していくことになる。『平家正節』も江戸へ、そして各地へ伝播する中で変容していくことになる。

『平家正節』と称する譜本は『国書総目録』の「平曲譜本」の項目だけでも二九点、書名は異なるが正節式に記譜されている譜本（例えば『平曲正節』あるいは『平家正説』）も含めれば、四〇点を越える（岩波書店一九九〇 第七巻 一九一—一九二頁）。それらは、伝播の状況や譜本そのものの特徴から、京都・名古屋系正節と、江戸系正節に二分され、細かく見れば図表1の①から⑤の五種に分類される。

図表1 『平家正節』の諸本の分類

京都・名古屋系	①草稿本（一部正節完成以前の記譜法の残るもの。也有本など） ②荻野編纂本（尾崎家本とその写本）
江戸系	③初期江戸伝播本（墨譜「上」を線条式で表すもの。豊川本など） ④江戸改訂本（江戸の語りに合わせて改訂されたもの） ⑤津軽系本（津軽の愛好家たちが書写したもの。楠美晩翠写本など）

本稿では、完成した荻野編纂本がどのように江戸に伝播したかをみるために、表1の②、③、④について紹介したい。なお、各グループの特徴や譜本の所属の決め手となる特徴については、譜本のそのものをさらに注意深く比較検討する必要があるが、ここではその大まかな見通しを述べておく。

(2) 荻野編纂本——尾崎家本とその写本類

荻野検校が完成した『平家正節』およびその忠実な写本類を荻野編纂本と呼ぶことにする。現在名古屋の尾崎家に所蔵される『平家正節』（以下「尾崎家本」）には、「荻野知一」の印があり、また、尾崎家は荻野検校の一人娘の嫁ぎ先であっ

たことから、この譜本は荻野検校が編纂した『平家正節』か、あるいはそれに非常に近い写本と思われる。

尾崎家本は三九冊からなる。二序一跋を含む付録が一冊、普通に教習を許される「平物」が三〇冊、伝承上の制約がある「習物」が六冊、「間の物」一冊、「小秘事」一冊である。「間の物」および「小秘事」には荻野検校の印がなく、この二冊を除く三十七冊が荻野編纂本の基本の形ではないかと思われる。

『平家正節』と一緒に所蔵され、しばしばその冊数に加えられるものに、「大秘事」「八坂流訪月」「平家物語 指南抄」「柱経」「目録」などがある。大秘事は重い習物で、当道の検校である荻野がみずからその楽譜を作成することは考えられない。館山漸之進は、「薩州公御伝授の時、御近習に書写方命ぜられ、密かに写し取り」、譜ができたとして記している（館山一九一〇・四二七）。また「八坂流訪月」は、「(三島) 自寛のおほへ居たるを学びて今は瞽者の方にも再興したる」もので（筑波大学蔵・岡正武写『八坂流訪月』跋文）、年代の判明する最古の写本は天保三年（一八三二）写の江戸の清川勾当本（東洋文庫蔵）であることから、大秘事同様、荻野編纂本には含まれなかつただろう。「指南抄」と「柱経」はそもそも荻野検校の編著書ではない。

さて、荻野編纂本のグループに属する『平家正節』に共通する特徴として、以下のことがあげられる。

- a 丹羽敬中の序文の日付が安永五年九月である
- b 基本の三十七冊を含む
- c 巻通しの構成法を持つ
- d 『平家正節』という題を持つ
- f 写本による異同が少ない

尾崎家本をはじめ、かなりの数があると思われるが、そのうち三点を以下にあげる。

①豊橋市立中央図書館蔵『平家正節』。基本の三十七冊に「目録」が付随、「指南抄」「塔之平家句組」「柱経」が別置される。改行や字配りまで尾崎家本に似ているが、墨譜の付き方には小異がある。

② 国風音楽会所蔵『平家正節』。基本の三十七冊のうち「灌頂巻」を欠く。「問の物・八坂流訪月」「小秘事」「平家指南」の三冊が付随する。箱蓋に貼られた一覧には「灌頂巻」も含まるので、かつては基本の三十七冊が揃っていたと思われる。詞章の書き方は豊橋本ほど尾崎家本に似てない。墨譜には小異があり、その一部は豊橋本に重なるが、朱による訂正の結果尾崎家本と同じになっている個所もある。

③ フェリス女学院大学蔵『平家正節』。基本の三十七冊に、「小秘事」「極秘（大秘事）」「十九止（問の物）」「八坂流訪月」「付録全（目録）」を含めて四十二冊。「指南抄」「柱経」が別置される。墨譜は尾崎家本と小異がある。

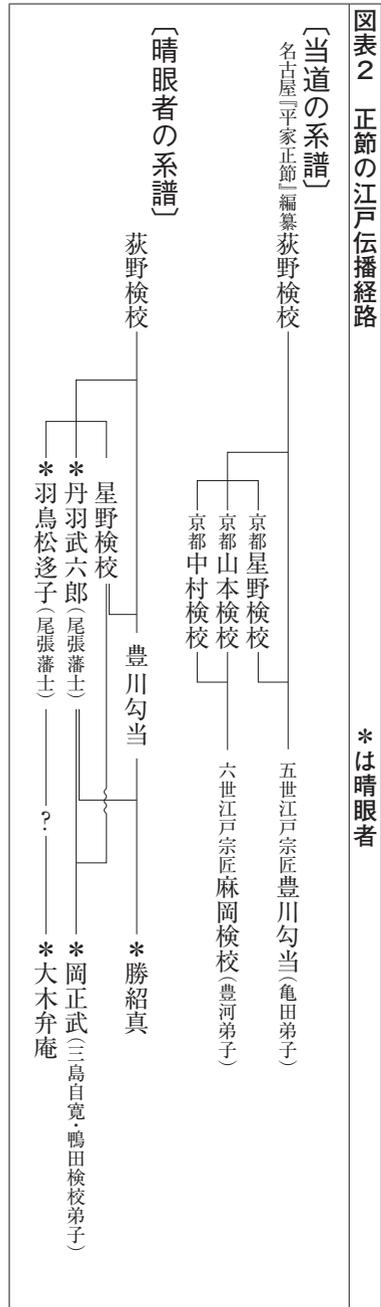
これらは皆名古屋周辺で成立しており、尾崎家本のように成立の古いものと、フェリス本のように明治期に書写されたものとの間に、大きな異同が見られないので、名古屋周辺では、荻野編の原本が、比較的忠実に書写され続けていたと思われる。

(3) 初期江戸伝播本

正節の江戸伝播には、いくつもの経路が考えられる(図表2)。江戸の平家宗匠であった、豊川勾当も麻岡検校も、直接荻野またはその弟子たちから正節の平家を習っている。勝紹真や、岡正武のような熱心な嗜家のたちも、機会を捕らえて、正節を学んでいる。彼らにとって、丹羽武六郎や羽鳥松彦子のような尾張藩士たちは貴重な情報源であった。

豊川勾当に伝わりその周辺で用いられた正節、およびそれと同じ記譜法を持つ譜本類を、「初期江戸伝播本」と名付ける。例としては、①「豊川勾当本」と②『平語小曲』がある。

図表2 正節の江戸伝播経路



① 「豊川勾当本」。早稲田大学演劇博物館蔵『前田流譜本平家物語』二十四冊のこと。江戸の豊川勾当現存（？）一八一九以前（？）は、亀田検校の元で修業しているが、後に荻野とその弟子星野にも平家を習っている（鈴木一九八四 一六頁）。これは正節による平家を修得するためであったと思われる。そして、豊川の晴眼の弟子、勝紹真は、豊川周辺の愛好家たちが用いていた譜本に豊川勾当所持の正節本の譜を書き込んだ。これが豊川本である。詞章の右側には朱で原譜が記されるが、左側に墨で正節譜が書き込まれている。十二巻本の『平家物語』の順に記され、「小秘事」は十二巻下に含まれる。「大秘事」は含まない。また荻野編纂本の「付録」にあたる内容もない。正節譜は尾崎家本に非常に近い。

② 『平語小曲』（高樗訪月撰、江戸、大阪、京都一八〇〇刊）。平家譜本史上唯一の刊本で、平家の聴かせどころを集めた小品集。乾坤二冊。『平家物語』各巻から一句ずつ巻通しのやり方で上中下三セット三十六句を選び、そのなかの聴かせどころを抽出して収めてある。乾の冊には、平家正節の節名目並象と上之巻を、坤の冊には中の巻、下の巻を

載せる。

『平家正節』が最初に江戸に導入されたとき、江戸では荻野編纂本をそのまま書写せず、「口説」などに用いられる「上」という文字式の墨譜を「」または「一」のような形状の線条譜に置き換えて書写したようである。「豊川勾当本」では、「」を正節の「上」に、または「一」正節の「小上」に当てている。また『平語小曲』は、「」を「上」に、「コ」を「小上」に当てている。江戸には、まずこの形で『平家正節』が紹介されたようである。

(4) 江戸改訂本——岡正武の校合作業

初期伝播本が江戸風の線条式の記譜法をとりいれたことや、吟譜はじめ何種類かの譜本類がすであつたこと、さまざまな経路で正節が江戸に導入されたことなどから、江戸では、『平家正節』の記譜法について多少混乱があつたようである。江戸の晴眼愛好者岡正武は、大々的な譜本の校合作業を行っている。岡の関わった正節は二点ある。

①京都大学国語国文学研究室蔵『平曲正節』十八冊。校合作業に用いられた譜本で、巻通し式の平物十五冊、習物が三冊である。この譜本に含まれていたと考えられる「琵琶譜(付録)」が早稲田大学演劇博物館に蔵される。両方をあわせれば、荻野編纂本の基本の三十七冊と同じ内容となる。底本は、京都名古屋系正節(二二六曲)、江戸初期伝播本式正節(計三九曲)、吟譜に江戸初期伝播本式正節を書き込んだもの(計二七曲)の三種が混ざっている。吟譜とは岡村玄川が一七三七年に編纂し、江戸の一部の平家愛好家の間で用いられていた譜本である。底本の正節譜は尾崎家本に近いが、そこに朱や墨でたくさん校異が書き込まれている。「小上」を「コ」と書く。また、付録に含まれる丹羽敬中の序文は九月の日付を持つ。

それらの校異の正否を、岡正武が京都の星野検校に問うた書が『平曲問答書』(岡一八二〇)である。岡正武はその後、

星野から寄せられた『平曲問答書』の答えを参考に浄書本を作成したと思われる。

②早稲田大学演劇博物館蔵『平家物語節附本』二〇冊。この譜本がその浄書本である可能性が高い。一二巻本の『平家物語』の順に配列されている。「灌頂巻」「小秘事」「大秘事」を欠く。記譜法は正節式であるが、「詢」「中洵」のよ
うな文字遣い、「小上」を「コ」と表記すること、曲節名を朱棹で囲うことなどの特徴がある。また、丹羽敬忠の序
文が安永五年六月の日付を持つ。

(5) 江戸改訂本——麻岡検校の改訂

江戸の平家宗匠麻岡検校長歳一は、天保三年（一八三二）と五年、京都に上って荻野の弟子の中村、山本に正節の平家
家を習う。『平語小曲』や「豊川本」の左譜からわかるように、当時、すでに正節は江戸にも紹介されていたのにもか
かわらず、『平家音楽史』では、麻岡検校を正節の導入者とみなしている（館山一九一〇三七五）。江戸では麻岡に至っ
て、ようやく、『平家正節』が、前田流平家の語りの正本としての地位を獲得したと考えられるのである。

京都と江戸の平家は、京都で修行した亀田意一（一七六五年登官。第四世江戸宗匠）が江戸で活動するなど、交流が
あったものの、豊川勾当現誉の時代には、同じ前田流でも多少の差異が生じていたようである。豊川時代の江戸の語り
を伝えると思われる豊川勾当本（早稲田大学演劇博物館蔵）の原譜と、後から同書に書き込まれた荻野の考案した正節
譜とは、墨譜の位置に時折ずれがみられるし、詞章にも小異がある。

麻岡は、豊川勾当の孫弟子なので、基本的には江戸の語りを身につけていたと思われる。しかし正節を導入するにあ
たって、江戸と京都・名古屋の語りに異同があること気付いたのではないだろうか。そしてそれを晴眼の弟子たちが、
稽古の折に麻岡の語りに合わせて江戸風に改訂して行ったのではないだろうか。

その特徴は以下のようになる。

- a. 丹羽敬中の序文の日付が安永五年六月である
- b. 必ずしも『平家正節』という題を持たない
- c. 必ずしも巻通しとは限らない
- d. 墨譜の位置や、曲節の書き方、用字など、写本により異同がある
- e. 冊数は、十二、十九、二十などいろいろの冊数のものがある

この類の写本としては以下のようなものがある。

① 東洋文庫蔵『平家曲節』（清川勾当本）。四三冊。基本の三十七冊に「小秘事」「平家正節目次（目録）」二冊、「平家正節（節名目並象）」「八坂流訪月」「平家物語 拾式目／末（譜はない）」が付随する。巻通し。譜の付き方は国風会本に似ているが、丹羽敬中の序文は六月の日付を持つ。節名目並象の冊に麻岡の弟子の「福住氏」と記され、八坂流訪月の末には、「于時天保三壬辰年六月清川勾当坊需写焉令伝受畢」とある。

② 館山甲午旧蔵『平家節譜』（麻岡検校口授本）。九冊。普通の『平家物語』の巻九から巻一二にかけて、一卷を二、三冊に分冊にし、装丁を新しくしたものが、他の譜本類と一緒に館山甲午氏のもとに所蔵される。第一二巻の奥に「右平家物語十二巻并間之物十三句語替二十二節物当流中興名人荻野検校知一宗匠校合改正之正節也麻岡宗匠予口授伝授畢」とある。十二巻本という意味で演博の岡正武本と共通する。

（6）二種類の丹羽敬中序文について

京都名古屋系正節と江戸系正節とは、丹羽敬中の序文の日付が異なる。従来、この違いについては、安永五年六月

にいったん完成を見て江戸へ伝播したが、名古屋では、さらに整譜作業が続き、最終的に九月に完成したものが使われたというように考えられてきた(奥村一九八一 一〇五頁)。しかし、正節の江戸伝播はさまざまな経路で行われており、しかも、現存する六月序文の一番古いものが東京大学蔵の「天野忠景本」(一七七七写)である。

尾崎家本の九月序文と青洲文庫本の六月序文の内容を比べてみると、その相違はつぎのようにまとめることができる。

①全体に九月序文は言葉が難しく、文体が古めかしい。九月序文では、「叔末之秋」、「多痾」、「帰道山」など、難解な用語が多く用いられているが(平家正節刊行会 一九七四 五一―六頁)、六月序文では、「漸衰」、「多病」、「死」など、平明な表現になっている。

②九月序文では、荻野の伝記を記すにあたって、年号を元号と干支のみで記してあるのに、六月序文では、数字を付している。たとえば、九月序文の「宝曆癸酉年」「己卯」は、六月序文では「宝曆三癸酉年」「宝曆九年己卯」となっている。

③九月序文では荻野を「荻野氏」とよび、六月序文では「荻野先生」と呼ぶ。

以上三つの相違点は、いずれも、六月序文の後出性を示しているように思われる。九月序文の難解さは、漢文を得意とした君山学派らしい格調を示すのに対して、六月序文の平明さは、儒学者らしさに欠ける。

荻野の伝記を記すのに、数年前のことであれば、干支だけで十分だが、十二年以上、つまり干支が一回りする以前のことであれば、元号や年数を干支ともに示すほうがわかりやすい。

また、「先生」という敬称だが、丹羽敬中はこの序文を書いた翌年に亡くなっており、荻野よりかなり年輩であった。その意味では、敬中が荻野を「先生」と呼ぶのはいささか不自然である。「先生」と呼ぶのは、荻野より若い人あるいは荻野の弟子たちではないだろうか。

六月序文は、江戸系の正節にしか見いだされない。安永五年を下ったある時期に、誰か別の人の手によって平明でわかりやすく、しかも荻野への敬意を盛り込んで書き直されたとは考えられないだろうか。そうだとすれば、それができ

るのは、敬中の婿養子で、荻野の正節編纂にかかわった丹羽氏章か、その息子の丹羽武六郎ではないだろうか。武六郎は「荻野検校中琵琶も平曲も第一の上手」で（岡正武「平曲問答書」跋文）、荻野から直接平家の指導を受けており、勝与八、岡正武などの江戸の愛好者たちとは、琵琶譜を貸与したりして直接交流があった。武六郎は、祖父の序文が難解で不明瞭なことに不満をもち、父の氏章あるいは自らが書き改めた六月序文を、江戸の平家愛好家に提供した可能性も考えてよいのではないだろうか。

(7) まとめ

以上述べてきたように、『平家正節』はその成立後、当道座の前田流平家の正本として、他の地域にも伝えられることになるが、江戸の前田流は京都・名古屋の前田流の語りとは少し異なっており、それに合わせて、『平家正節』も変容を遂げるようになった。荻野の編纂した『平家正節』と江戸系の『平家正節』の違いは、完成前の『平家正節』が流出して江戸に伝わったというようなことではなく、岡正武のような熱心な晴眼愛好者や、麻岡検校長歳一のような江戸系の演奏家の手によって、江戸系の語りにあった『平家正節』が成立した結果とみなすべきであろう。

*本稿は拙著『平家の音楽』（一九四・二〇八）を、改稿したものである。

【引用文献】

- 奥村三雄 一九八一 『平曲譜本の研究』東京・櫻楓社。
 鈴木孝庸 一九八四 「解題 第四節 撰者、諸本、成立」秋永一枝 他編『平家物語 前田流譜本 一』。
 一九九四 「豊川本平家物語・解題補遺」『平曲鑑賞会会報』一四号。

館山漸之進

二〇〇二
一九一〇

「平曲伝承資料の基礎的研究」科学研究費補助金研究成果報告書。
『平家音楽史』。木村安重刊。

(武蔵野音楽大学教授)